

1. 調査

層序 調査地全域をおおう盛土は厚さ0.8～1.0mにおよび、その下の層序は、基本的に上から、水田耕作土（厚さ20cm）、床土（20～30cm）、灰褐色砂質土（20cm）、褐色粘土（地山）の順になっている。床土下の灰褐色砂質土層は比較的多くの土師器・須恵器と少量の瓦器を含む層で、旧水田面の高い調査区の東方では厚く、西方にゆくに従って薄くなっている。検出した柱穴がいずれも極めて浅いことを考えると、この層は藤原京時代の生活面の削平によって形成されたものと思われる。また、この層には間層として数層の灰色あるいは褐色粗砂層がみられ、この地が中世以降幾度も洪水にみまわれたことを窺わせる。遺構はその下の地山面で検出したが、褐色粘土層は西区を中心にして、比較的薄く広がる土層であって、東区では主にその下層の黄灰色微砂層や、それをえぐる弥生～古墳時代の自然流路の堆積層である暗灰色粘土層、あるいは灰色砂層が検出面となっている。遺構検出面は東南で高く西北に低くなっており、調査区の東端と西端との間（距離約90m）で約40cmの差がある。

検出遺構 検出した遺構には、道路、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、溝、土塙があり、時期によって藤原京時代の遺構とその他（弥生時代および中世）の遺構とに大別される。以下、その順序に従って記述するが、後者には調査区全域に東西、南北方向の小溝が多数あり、中世およびそれ以降の水田耕作にかかわる溝と考えられている。東区では特に南北小溝の重複が著しく、中世以降の開発の著しい事を示すものであるが、ここでは図示記述ともに省略する。なお、遺構には一連番号を付し、遺構の種別を示すために、SA; 塀、SB; 建物、SD; 溝、SE; 井戸、SF; 道路、SK; 土塙などの記号を番号の前に付した。

東一坊大路とその両側溝、および大路の東と西の坪内に掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、溝、土塙などがある。以下、東一坊大路、左京二条二坊西北坪、同一坊東北坪にわけて説明する。

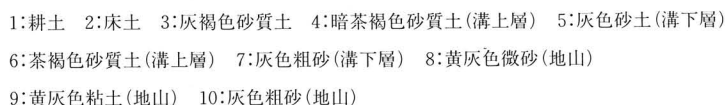


fig. 4 東区北壁土層図（東一坊大路 1/85）

東一坊大路SF5100 (PL. 2, fig. 4)

調査区中央を南北に貫通する2条の南北溝SD5110・5111を東西の側溝とする道路で、28m分を検出した。検出面での路面幅は6.5mで、東西両側溝の心々間の距離は8.6mである。路面上に整地土層などはなく、この時期の建物などとも重複しない。幅員は、これまで確認されている藤原京大路のうち、朱雀大路と宮周囲の大路を除く一般の大路の幅員が、約16mであるのに比べて狭く、既知の例では三条大路に類似する規模である。大路は調査区北端と南端とでは国土方眼方位の北に対して約1°西に振れている。

東側溝SD5110 幅1.8m、深さ0.4mの南北素掘溝で、24.4m分を検出した。溝の横断面形が浅い皿状をなし、平らな底には流水の渦による小穴が多数あり、粗砂が詰っている。溝底はゆるやかに北へ下降し、南と北とでの高低差は約20cm。埋土は上下2層に大別され、上層は茶褐色砂質土で埋立土、下層は灰色砂土で流水時の堆積土とみられる。いずれにも飛鳥Ⅲ～Ⅴ期の土器が含まれ、上層からは藤原宮の瓦が少量出土した。この溝の東岸には、南寄りで東西溝SD5112が流入し、北寄りに弧状溝SD5113がある。

西側溝SD5111 幅2.2～2.6m、深さ0.4mの南北素掘溝で、28.7m分を検出した。SD5110と同じく底は平らで、底での幅は1.4m。底面の南北での高低差は約17cm。溝の東岸中程を中心に護岸のための杭跡(直径10cm弱)がある。南寄りには底に、流れに直交する方向に堤防状の高まりがみられるが性格は不明である。埋土は上下2層に大別され、上層の暗茶褐色砂質土が埋立土で、下層の灰色砂や炭混じり灰色砂土が堆積土。両層から飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の土器が出土し、上層に藤原宮の瓦が含まれる点は東側溝SD5110と共通する特徴である。このほか、調査区北端の西岸に近い砂層から和同開珎銀銭3枚が出土した。

左京二条二坊西北坪内の遺構

掘立柱建物9棟、掘立柱塀1条、溝5条、井戸1基、土壇3基がある。それらは重複関係や配置および出土遺物の検討から、1～3の3期にわかれる。以下、各期別に記述する。

1期の遺構 掘立柱建物SB5101、SB5102、溝SD5116、井戸SE5120があり、建物は北でやや東に振れた方位をもつ。出土遺物からは藤原宮造営直前の時期とみられ、条坊道路と併存する可能性がある。

掘立柱建物SB5101 東区中央にある総柱建物。東西2間(総長4.4m、以下同じ)、南北3間(4.9m)の南北棟である。柱掘形は一辺0.7～0.9mの方形で、直径25cmの柱痕跡をもつものがある。いずれの柱穴も深さ20cm未満と浅く、著しい削平を受けていると思われる。柱間は東西2.2m等間、南北1.6m等間に割り付けられる。SA5109、SD5118より古く、柱穴から飛鳥Ⅳ期の土師器が出土した。

SB5102 東区中央南端にある東西3間(3.9m)、南北2間(4.6m)の南北棟。中央にいま一つ柱穴があり変則的な総柱建物である。柱穴は0.8～1.0mの方形で、深さ50cm。いずれも柱は抜取られているが、柱のあたりの円弧から柱径は20cmあまりとみられる。柱間は南北2.3m等間、

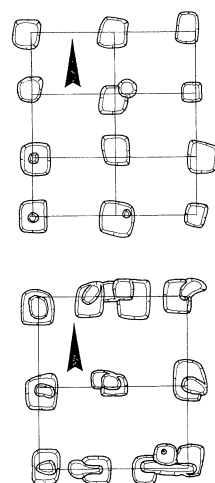


fig. 6 SB5101(上)
SB5102(下) 1/200

東西は側柱列が1.2m等間、中央は1.95m等間となる。柱抜取穴から飛鳥Ⅳ期の土師器杯が出土した。重複関係ではSB5103よりも古い。

溝SD5116 SB5101とSB5102との間にある南北素掘溝。新旧2条の溝が重なっているが、ともに幅0.8m、深さ25cmで南に浅くなり調査区の中程で途切れる。重複関係の新しい東の溝は15.7m分を検出し、南と北での高低差は23cmで他の溝に比べて大きい。埋土の暗褐色粘土から飛鳥Ⅳ期に対比される土器が少量出土した。SB5105の庇柱よりも古い重複関係にある。

井戸SE5120 調査区の東端にある。深くまで壊されているが、東辺に最下段の井戸枠板1枚が遺存する。枠板は幅18cm、長さ125cm、厚さ2cmで、検出面下0.7mの地山砂層に下底部をおき、井戸底は1.1mの深さにある。それから復元される井戸は、二段掘りとした掘形の上段に、方形横板組の井戸枠を設け、下段は素掘りのままか曲物を据えたものとみられる。埋土中から飛鳥Ⅲ～Ⅳ期の土器が出土した。

土壌SK5121 SB5102の東の浅い土壌。3.4×2.3mの平面楕円形。炭を多量に含む。

SK5123 SB5101の真南1.8mにある小土壌。平面は1.1×0.9mの楕円形。深さ20cm。埋土から飛鳥Ⅳ期の須恵器が出土した。

2期の遺構 掘立柱建物SB5103・5104・5105・5106、掘立柱塀SA5109、溝SD5112・5113・5118などがあり、建物等は北で西に振れた方位をもつ。

SB5103 SB5102の東に重複する梁行2間(3.2m)、桁行4間(4.6m)以上の南北棟建物。柱穴は一辺0.6mの方形で、深さは45cm。大半の柱穴に直径15cmの柱痕跡があり、柱根が残る柱穴もある。柱穴・柱の規模や特徴は2期の建物すべてに共通するものである。SB5102より新しく、SB5107より古い。柱穴から藤原宮期の須恵器杯などが出土した。

SB5104 東区中央にある梁行2間(4.0m)、桁行3間(6.3m)の南北棟建物。柱間は梁行2.0m等間、桁行は2.1m等間。西側柱列がSB5105の西側柱列と柱筋がそろって位置にある。

SB5105 東区北端にある東庇付の南北棟建物。梁行2間(4.5m)、桁行4間(6.3m)以上。柱間は身舎梁行が2.25m等間、庇の出1.7mで、桁行は2.1m等間。庇の柱穴は身舎よりも小さいが、柱痕跡は身舎と同径でその底面は身舎柱より深い位置にある。庇柱列がSD5116より新しく、身舎東側柱列がSB5106の西側柱列とそろって位置にある。柱穴から飛鳥Ⅴ期の土師器が出土した。

SB5106 SB5103の東にある梁行2間(3.3m)、桁行3間(5.6m)の南北棟建物。柱痕跡がやや細い。柱間は梁行1.65m等間、桁行は北端の間が1.7mで、他は1.9m等間。北から2本目の梁行がSB5103の北妻柱列とそろって位置にある。

SA5109 SB5104とSB5105との間にある東西塀。11間(19.2m)分を検出。北側の建物SB5105と南の建物SB5103・5104・5106とを区分する位置を占める。柱穴は一辺0.5～0.7mの長方形で柱筋方向に長く、深さは30～50cmで東方の柱穴が深い傾向にある。柱間は1.5～1.9mと不揃いである。柱穴から飛鳥Ⅴ期の土師器蓋などが出土し、SB5101より新しい重複関係にある。

溝SD5112 SB5104の南をやや蛇行して西流する東西素掘溝。長さ

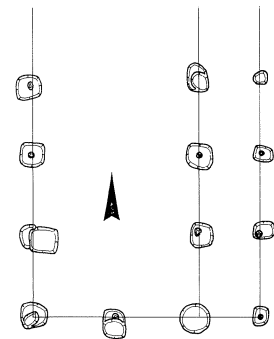


fig. 7 SB5105 (1/200)

23m分を検出した。溝底東西端の高低差は10cmたらずで緩やかである。溝は中央部の一段深い二段掘りで、下層は幅0.4～0.8m、深さ20cmで底には灰色粗砂が堆積する。幅広く浅い上層の埋土は暗褐色粘土で、溝内には飛鳥Ⅴ期の土器が多く含まれる。溝西端はSD5110に至り、粗砂層がSD5110の下層に流入することからSD5110と併存する溝であることがわかる。溝の東端は土壇SK5119に壊され、以東にはたどれない。また、SD5110の東を並走する南北溝SD5115より古い重複関係にある。

SD5113 東側溝SD5110の東岸にある弧状の溝。幅0.6～1.1m、深さ20～30cmで、埋土は上層の茶褐色粘土と下層の灰色粗砂とにわかれる。この粗砂層はSD5110の埋立土の下に流入し、この溝がSD5110と併存することを示している。南端はSD5110の東岸中位（底から24cm上）にあり、北端はSD5110の底から10cm上に流れ込む。この間約16cmの高低差があり流れは急である。SD5110の迂回路としての機能をもつとみられるが、SD5110の堆積層にはこの間に他との違いがないことから具体的な使用状況は明らかでない。

SD5118 東区東寄りの南北素掘溝。調査区南端に始まり、幅1.2m、深さ30cmで北流する。長さ25.2m分を検出。底面の南北での高低差20cm。埋土は大きく2層にわかれるが、底には灰色粘土が堆積しており滞水していたことを示している。これは南端での途切れ方が急なことから合わせて、溝が堀割として機能していたことを窺わせる。なお、上層の茶褐色砂質土には飛鳥Ⅲ期の土器と多量の炭が含まれるが、これは周辺に広がる土壇状の窪みにともなう遺物で、溝の時期を示すものではない。SB5101より新しくSE5125より古い。

SK5119 SD5112の東端にある長方形の大土壇。4.1×1.2m、深さ1.2m以上。暗灰色の砂と粘土が交互に水平堆積し、木片、土器片、焼けた流紋岩片などが出土した。井戸の可能性もあるが調査時の湧水が激しく確認できていない。

3期の遺構 掘立柱建物SB5107・5108・5126、溝SD5115がある。重複関係では2期の遺構より新しく、北で東に振れる方位をもつが、2期の改造にあたりとみられる。

SB5107 SB5102・5103の北に重複する梁行2間（4.1m）、桁行3間（5.9m）の総柱の南北棟建物。柱穴は一辺0.3～0.4m、深さ30～40cm。柱間は梁行2.1m等間、桁行1.9～2.0m等間。SB5103、SD5112より新しい重複関係にある。

SB5126 SB5107の東にある東区唯一の東西棟建物。桁行4間（7.8m）、梁行2間（3.4m）である。柱穴は0.5～0.7mの方形で、深さ40cm。直径15cmの柱痕跡がある。柱間は梁行1.7m等間、桁行は西端の間が1.7mで、他は1.95m等間に復元される。

SB5108 SB5105の西にある3個の柱穴で南北棟建物の南妻柱列である。柱穴は0.4～0.6mで径10cmの柱痕跡がある。柱間は1.8m等間。

SD5115 東側溝SD5110の東3.6mの位置を並走する南北素掘溝。幅1.25m、深さ25cmで、28m分を検出した。溝底の南と北とでの高低差は10cmたらずで緩やかな流れである。埋土は上下2層にわかれ、上層の黄褐色砂質土と下層の灰色砂土とから藤原宮期の土器が出土した。この溝はSD5112、SD5113よりも新しい重複関係にあることから3期に含めるが、振れや出土遺物の特徴は、他の2期の遺構や大路の側溝と同じであって2期に属す可能性がある。

左京二条一坊東北坪内の遺構

掘立柱建物5棟、溝3条、井戸2基、土壇5基などがあるが、削平が著しく全容の把握は困難である。以下、遺構の種類別に記述する。

掘立柱建物SB5161 西区中央にある東西棟建物。梁行2間(3.6m)、桁行4間(8.4m)。柱穴は1.0mの方形で深さ30cm。直径15cmの柱痕跡をのこすものがある。柱間は桁行2.1m等間、梁行1.8m等間。柱筋は掘形を結ぶ方位と異なり、北でやや東に振れる。

SB5162 西区西端の東西棟建物。梁行2間(3.2m)、桁行4間(6.5m)以上。柱穴は一辺0.9mの方形で深さは60cm。いずれの柱穴にも直径20~25cmの柱痕跡があり、埋土に黄色粘土の小塊が混じる。SB5161とともに左京二条二坊での1期に対応する。

SB5163・5164 SB5162の南と北とで検出した。ともに梁行2間の東西棟建物の東妻柱列と思われる。一辺0.6mの柱穴に直径15cmの柱痕跡がのこる。

SB5165 西区東北部にある南北棟建物。梁行2間(3.5m)、桁行3間(3.9m)以上。柱掘形は一辺0.5m、深さ30cmで、直径15cmの柱痕跡がある。北でやや東に振れる方位をもち、3期に対応するとみられる。柱穴埋土に奈良時代初頭の土器が含まれる。

溝SD5155 SD5111の西6.0mを並走する南北素掘溝。幅1.0m、深さ25cmの断面V字形で、28.7m分を検出。南北での高低差は20cm。SB5165よりも古い重複関係にあり、2期に対応するとみられ、敷地の外側を仕切る溝と考えられる。藤原宮期の土器が少量出土した。

SD5175・5176 西区西北部の逆L字形に曲る素掘溝。幅1.9~2.5m、深さ10cmたらずで、中央部(幅0.6m)が一段深くなった二段掘りの溝である。SB5162の柱穴よりも新しく、SK5172よりも古い。埋土から藤原宮期の土器が出土したが、そのうち、須恵器播鉢(fig.10, 27)が東側溝SD5110出土品と直接接合し、両溝の埋没時期の近いことを窺わせる。

井戸SE5160 (fig. 7) SB5161と西側溝SD5111との間にある。掘形は二段掘りで、上半は平面六角形の播鉢形、下半は径0.6m、深さ0.6mの円筒形。下半中央に径30cmの曲物を据えたとみられ、周囲に砂と粘土とが交互に積まれている。上半は井戸枠の抜取穴とみられるが、平面形が井戸枠の形状によるものか、抜き取り方によるかは不明。飛鳥Ⅳ期の土器が出土した。

SE5170 SB5162の東北にある素掘りの井戸。検出面での平面形は1.0×0.9mの楕円形で、中程から下は径45cmの円形。深さ1.3m。藤原宮期の土器が少量出土した。

SK5171 SE5170の北の1.2×1.0mの方形土壇。深さ45cm。

SK5172 SB5162の内側にある0.8×1.0mの方形土壇。深さ90cm。埋土がほぼ水平堆積で井戸とは考え難い。SD5175より新しく、3期に対応する。飛鳥Ⅴ期の土器が少量出土した。

SK5157・5167等 西区の各所に浅い小土壇があり、飛鳥Ⅳ期の土器が出土した。

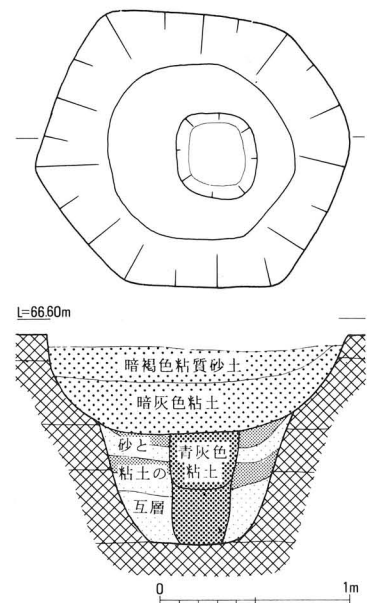


fig. 8 SE5160(1/40)

3. その他の遺構

藤原京時代以後中世の遺構には、掘立柱建物SB5127・5128、掘立柱塀SA5129、井戸SE5125のほか小溝が多数ある。また、弥生時代から古墳時代の遺構には土壇SK5130・5131・5132と、自然流路にかかわる溝SD5133・5134がある。

SB5127 東区のSB5104などと重複する小規模な東西棟建物。3間（5.0m）×2間（3.2m）。径0.4mの柱穴に径10cmの柱痕跡がある。西北隅の柱を欠く。

SB5128 SB5127の西北に重なる3間（4.8m）×2間（3.3m）の東西棟建物。SB5127とともに小規模な柱穴で、北で東に振れる方位をもつ。

SA5129 SB5127の南にある3間（4.9m）の東西塀。建物の南側柱列の可能性がある。

SE5125 SD5118と重複する井戸で、直径0.9mの円形掘形に径0.7mの円形縦板組の井戸枠を据える。深さ1.6m以上。井戸枠内には飛鳥Ⅲ～Ⅴ期の土器が含まれるが、埋土上部から瓦器片が出土し、また、井戸より新しい小溝と古い小溝とがあって、中世の井戸と考えられる。

SK5130 (fig. 9) 東一坊大路の路面敷上にある直径0.9m、深さ0.9mの円形土壇。埋土は4層にわかれ、その上位と中位とから弥生時代後期の土器が出土した。

SK5131 東区中央にある直径1.0mの円形土壇。深さ0.6mの播鉢形の断面で、埋土は中くぼみに堆積する。頸部に刺突竹管文のある弥生時代後期の長頸壺などが出土した。

SK5132 東区東北部にある0.8×0.9mの楕円形小土壇。断面形が播鉢形で深さ40cm。古墳時代初頭の土師器甕が出土した。

SD5133等 SK5132と重なる斜行溝SD5133・SD5134は、東区の東半を蛇行する自然流路の上層にあたり、弥生時代後期の土器が少量出土。

自然流路には弥生時代中期の土器や石鏝（PL. 8）が含まれる。

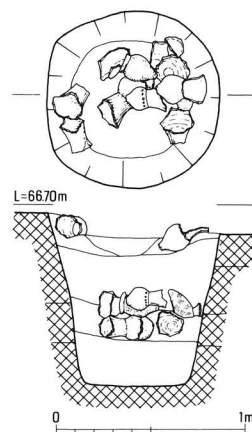


fig. 9 SK5130 (1/40)

時期	遺構番号	棟方向	柱間規模	桁行m	梁行m	庇m	備考
1	SB5101	南北	3 × 2	4.9	4.4		総柱建物SA5109・SD5118より古
1	SB5102	南北	2 × 3	4.6	3.9		総柱建物（中央の柱は1本）
1	SB5161	東西	4 × 2	8.4	3.6		左京二条一坊東北坪内
1	SB5162	東西	4以上×2	6.5以上	3.2		SD5175より古
2	SB5103	南北	4以上×2	4.6以上	3.2		SB5102より新、SB5107より古
2	SB5104	南北	3 × 2	6.3	4.0		西側柱がSB5105とそろう
2	SB5105	南北	4以上×2	6.3以上	4.5	1.7	SD5116より新
2	SB5106	南北	3 × 2	5.6	3.3		北から2本目の柱がSB5103とそろう
2	SA5109	東西	11	19.2	—		
3	SB5107	南北	3 × 2	5.9	4.1		総柱建物SB5103・SD5112より新
3	SB5108	南北	2以上×2	?	3.6		
3	SB5126	東西	4 × 2	7.8	3.4		東に振れる
3	SB5165	南北	3以上×2	3.9以上	3.5		SD5155より新

tab. 1 主要建物・塀規模一覧表